

全国大会へのおさそい

全体研会長 青 木 真

全国体育学習研究会は全国に跨がる民間の研究組織ですが毎年1回会員が一同に会して全国大会（全国体育学習研究協議会）を開催しています。この大会は開催地の授業提案を手がかりに自分の実践をふり返りより確かな実践につなげる協議の場（グループワーク）が中心となって進められます。今年の全国大会は三重の四日市において11月22日から24日の日程で開催されます。

全国大会の特徴の一つは体育授業の基本的な問題を協議するところにあります。全体研は昭和50年代から自発的な学習の成立をめざしてきました。言葉は違いますが学習指導要領でいうアクティブ・ラーニングや主体的で対話的な学びを先取りした授業実践に取り組んできた経緯があります。しかも、体育の場合は学習のあり方規定が先にあったわけではなく、学習内容の転換から導かれた学習の方向性でした。ですから、学習内容をどのように捉えるかは全体研の重要課題であり続けてきたわけです。この視点から今年の大会テーマをみますと「運動のおもしろさにせまる体育の授業づくり」となっていて問題が継続されていることがわかります。学習内容と言えば「技術・ルール・マナー」のことだと思ってしまうがちですが果してそうでしょうか。人間と運動の関係において基本的に大切にしなければならないことは何でしょうか。そのことが「運動のおもしろさとは何か」「おもしろさをどのように捉えどのように学習に生かすか」といった問題につながっているように思います。日常の授業実践を一時はなれてこうした基本問題に対峙してみることは、結果として自身の授業実践を変えていく契機になるのではないのでしょうか。

全国大会のもう一つの特徴は指導者不在の「参加者同志の協議」によって進められるところにあります。ですから、一人ひとりの思いや発想を交流させながら体育学習に夢をもてるような協議が開かれています。近年の体育科教育は学習内容への認識論が希薄であるように感じている私にとっても今大会のテーマをめぐる自由な協議が楽しみです。それはまた、学習指導要領の基準性を生かす力にもなると思います。学習指導要領は規準ではなく基準ですからそれを超える議論が可能なはずですが。学習指導要領に縛られた自分からそれを超えた自分への転換です。またそうした教師が求められているように感じます。

以上のような特徴を生かした議論の深まりを願いつつ、ここに改めて第63回全国体育学習研究協議会におさそいする次第です。